
一二 日本の朝鮮語學者と朝鮮の日本語學者

日本に於て朝鮮語が如何に學習せられ又朝鮮に於て日本語が如何に學習せられたかの一斑は既に前節に於て述べた通りである。併しながらそれ等は主と

して學習機關の沿革を説述したるに止まり、未だ其の語學者の研究を紹介するの機會に達しなかつた。そこで茲では兩國語學者中の主なるものを大略年次によつて列舉し、其の概略を述べようと思ふ。

一、日本の朝鮮語學者

日本の朝鮮
語學者
新井白石

○新井白石 名は君美、徳川時代の學者、朝鮮使臣の應接に當り、日鮮親交の上に貢獻する所多かつたことは、能く世人の知る所である。彼の著「東雅」は國語の語源を説きたるもの、其の日韓兩語の比較を論ずる點などに至つては、其の見識と卓見とに敬服せざるを得ぬ。本書「國語朝鮮語の語彙比較研究資料」の條を見たならば、其の一斑を窺ふことが出來よう。又彼の著に「同文通考」と稱するものがある。こは文字のことを論じた書で、漢字に關するもの以外、神代文字、肥人書、薩人書等のことを説き、時々諺文との關係などに論及して居る。

○寺島良安 「和漢三才圖會」に於て、朝鮮國語として單語百餘を列舉し、振假名を附して發音を示して居るなど、頗る其の勞を多とするに足る。

○伊藤東涯 京都の有名なる儒者である。彼の著「三韓紀略」に於ては諺文を以て悉

雨森芳洲

平田篤胤

穗井田忠友

曇に倣つて制したものであると論じ、朝鮮諺文字母反切二十七字なる書を著はし、諺文に假名を附して發音を示してある。

○雨森芳洲 彼の朝鮮語に關する知識に就いては、別項「雨森芳洲の朝鮮語學」の條に於て詳説したから、其の所を參照せられたい。

○平田篤胤 國學の大家、神字日文傳ひふまを著はして、我が國に漢字渡來以前就に固有の文字ありしことを説き、諺文は我が神代文字の彼地に傳はり行つて出來上つたものであると論じて居る。尙ほ彼の諺文に關する知識は修驗者行智に負ふ所が多いといはれて居る。

○穗井田忠友 平田篤胤の門人で、和歌をもよくし、多少諺文に關する智識をも有して居た。嘗て京都の醫福井晋から朝鮮版の大明律を借覽し、其の中に使用せられて居る吏道を研究したことがあるが、惜い哉該書の中にある吏道が吏道其のものなりとのことに氣が附かず、之を以て洪武年間に出版せられた原本の吏道を更に漢字を以て書き改めたものであるなど、全然間違つた論をなして居る。蓋し彼は當時の諸學者が動もすれば陥り易かつた如く、諺文と吏道と

の區別を混同して居たのである。

伴信友

○伴信友 有名なる國學者である。平田篤胤の「神字日文傳」に反對して「神代字辨」(假字本末附録)を著はし、我が神代文字の楷書の一體は、却つて朝鮮の諺文の我が國に傳はつて、好事家の手に存して居たものであると論じて居るが、彼が尙ほ吏道と諺文との區別を混同して居ることは頗る慊う感ぜられるのである。

松浦道輔

○松浦道輔 平田篤胤の門人、嘗て伴信友の「假字本末」に異見を挾んで「假字本末辨妄」を著はし、諺文と吏道とは根本より其の性質を異にするものなることを論じたが、又一方に於て朝鮮の「慵齋叢話」等の記事を曲解して、諺文は吏道によつて作られたものであると矛盾した説を述べて居る。

谷川士清

○谷川士清 國學者、其の著「倭訓栞」(日本書紀通證)等に於て、日鮮兩語の比較を試みて居ることは、別項「國語朝鮮語の語彙比較研究資料」に於て一斑を知ることが出来る。

太田全齋

○太田全齋 有名なる音韻學者である。其の著に「漢吳音圖」(附「漢吳音徵」及「漢吳音圖說」)とい

ふのがある。此の書は漢音、吳音と韻鏡とを比較説明した名著であるが、字音の論證を試みるに當つては、屢朝鮮の字音を引用して居る。

○黒川春村 音韻學者、「音韻考證」を著はし、太田全齋と同じく字音の考證には

朝鮮の字音をも引用して居る。彼の参考とせる朝鮮書は「訓蒙字會」「千字文」「類合」等であるが、就中「類合」などは四種の異本を參照して居る。

○石橋眞國 國學者、「漢字諺文對照音圖」「諺文音釋」等の書を著はして、諺文に關する説明を加へて居る。

以上は徳川時代に於ける學者の主なるものであるが、明治時代に入りては漸く科學的研究の曙光を認め、殊に二十七八年以後は岡倉由三郎氏、白鳥、金澤宮崎中田諸博士等の眞摯なる研究により、斯學は異常なる發達を遂げ、今日に至つたのである。此等諸學者の有益なる論文は、隨時單行本として又は雜誌上に於て發表せられて居るが、今一々其の内容を紹介する譯に行かぬから、茲ではこれに止めておく。

二 朝鮮の日本語學者

朴大根

○朴大根 宣祖頃の人。萬曆以後譯官として屢日本に渡航し、其の功頗る大なるものあつた。

康遇聖

○康遇聖 宣祖頃の人。壬辰の役、捕虜となつて日本に留まること十年、其の間日本語を學んで之に熟達し、遂に日本語學書「捷解新語」十卷を著はすに至つた。

洪喜男

○洪喜男 宣祖頃の人。譯官として日本に赴くこと六度に及んだとある。

安愼徽
朴再興

○安愼徽、朴再興 肅宗頃の人。康熙二十一年閔鼎重が語學獎勵の目的を以て偶語廳なるものを設置した際、此の兩人を倭學訓長として日本語を教授せしめた。

洪舜明

○洪舜明 肅宗頃の人。雨森芳洲と私交あり、又日韓國交上に偉大なる功績を遺した。

金健瑞

○金健瑞 英祖頃の人。日本語學書「捷解新語文釋」を著はせる外「増正交隣志」の著がある。

右の外譯官として渡日した者は其の數甚だ多く、又近頃に至り日本語に通じて居る人も少なからぬ有様であるが、學問的に之が研究に没頭したやうな人は

殆んど發見することが出來ぬ。